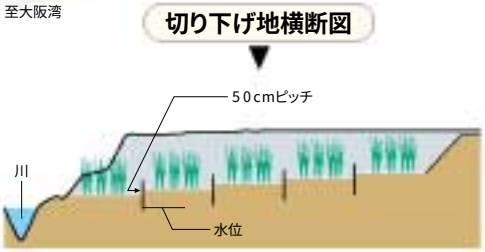
「親水」を考えた多自然型川づくり。

近年、建設省では河川に必要な治水対策を行いながら、地域性に富んだ自然環境を保全、創出し、再生を図る多自然型の川づくりを展開しています。そこには、人が水に親しみ、自然と共生するこれからの川づくりの新しい姿があります。琵琶湖・淀川水系でも、草津川の放水路工事や淀川のワンド整備などに、環境保全に配慮した川づくりが見られますが、今回は淀川中流域のヨシ原をご紹介します。

ヨシ原の保全に向けた多自然型川づくり。

大阪府高槻市の淀川低水敷に広がる面積約75ヘクタール（甲子園球場約18個分）の「鵜殿のヨシ原」。ここは淀川最大のヨシ原であり、コサギ、オオヨシキリ、カルガモ、カワラヒワなど、さまざまな野鳥やノウルシ、ミコシガヤなどの植物、さらにタヌキなどのほ乳類も生息する自然の宝庫として、人々に広く親しまれてきました。また、鵜殿のヨシは他の地域のものより太く、古くから雅楽器ヒチリキの吹き口に用いられ、文化的、歴史的にも高い価値を持つものです。しかし、この貴重なヨシ原が、最近、淀川の水位低下や他の植物との生存競争に負けて、しだいに減少しつつあります。とくに河川改修が進み、高い治水効果が得られたものの、ヨシの生育環境には好ましくない水位の低下が生じ、以前のようにヨシが冠水（水をかぶること）することも少なくなっています。そのため建設省では、地域の大切な財産であるヨシを守り、かつてのヨシ原を回復するための新しい2つの手法に取り組んでいます。まず1つは、平成8年度よりスタートした試験導水です。これは淀川からポンプで汲み上げた水をヨシ原内の水路に流し、生育に必要な水を人工的に供給、成長を調査するものです。そして、2つめは平成11年度より試験地を作り、淀川の水位とヨシの関係について調査をつづけている移植試験です。これは平成9年の平均水位を基本に、50センチメートルずつ5段階の高さに切り下げた試験地を設け、そこに地下茎を入れてヨシの育成結果を調べるものです。この実験によってヨシの成長に適した地盤の高さを割り出し、ヨシ原の保全整備に活かすことをめざしています。

移植試験で生育したヨシ



50センチメートルずつ段差をつけて切り下げた試験地イメージ図

導水路

鵜殿のヨシ原（大阪府高槻市）

取材協力／建設省淀川工事事務所環境課

前頁へ
次頁へ